作品タイトル

プリン、買いに行かん？

元にした作品のタイトル

なし

著者名

相坂　トア（あいさか　とあ）

一五〇文字以内のあらすじ

親友・祥子の彼氏が、知らない女の子と親しげに過ごす姿を見てしまった亜希。証拠の動画を撮ったものの言い出せず、翌日、余計な一言で祥子を傷つける。放課後、二人はプリンを半分こし、祥子は「それでも好き」と告げる。亜希は動画を見せず、「もうちょっとだけ見ててほしい」という願いに応える。

特記事項／概要・アピールポイント

親友の恋人の不誠実な姿を目撃したとき、それを伝えることだけが「友達のため」なのか。スマートフォンに残った十数秒の動画と、一つのプリンを半分こする二人の姿を通して、友人を守りたい気持ちと、本人の選択を見守ることの間で揺れる少女を描きました。登場人物と舞台を絞り、スマートフォンの画面、プリクラ、プリン、レジ袋など、感情の変化を視覚的な小物や動作で表現しているため、ショートフィルムとして映像化しやすい構成を意識しています。

本編文字数

3,476 字

今日は一人だから、前から祥子と話していた駅前のカフェに寄ってみるつもりだった。

（やのに、こんなとこでそんなん、なんで）

駅前の喧噪に紛れながら、亜希はスマホを構えて動画を撮っていた。震える右手を、左手で押さえつける。

初めは声を掛けようとした。でも、彼のとなりには知らない女の子がいた。

距離が近い。

笑い合う雰囲気がやわらかい。

女の子が彼の腕に自分の腕を絡めた。

彼が一口クレープを食べて、女の子に差し出す。女の子は腕を絡めたまま、口を寄せた。

（なんで、そこにいるんは祥子じゃないんよ）

スマホ越しの画面がガタガタと揺れている。これでは、映っているのが誰かなんて分からないかもしれない。それでも、亜希は動画を撮ることを止められなかった。

（今日、祥子は）

うまく回らない頭で考える。

（大丈夫、祥子は今日は塾）

録画画面の上にメッセージ受信の通知が出て、亜希は思わず肩をすくめた。

『【祥子】カフェもう行った？　良かったんやったら今度連れてって』

録画画面に重なった通知を見て、その温度差にめまいがしそうだった。

不意に、彼が顔を上げて、こちらを見た気がした。スマホを空に向けて、誤魔化せているのか、いないのか分からないまま、停止ボタンを押した。

一つ、大きく息を吐いて、亜希は目の下を手の甲でこすった。

「亜希、今日ずっと眠そうやったね」

翌日の昼休み、亜希の机でお弁当を広げた祥子が言った。

「あー、うん。うまいこと眠れんかった」

「おやすみ三秒の亜希が眠れんこととかあるんやね、今日、雪でも降る？」

「降らんわ」

小さく声を立てて笑った祥子が「はい、あげる」と、お弁当の中から玉子焼きと唐揚げを蓋に乗せた。その流れで亜希が購買で買ったサンドイッチをめくって、中の具を確認していく。

「なんやかんやでハムサンドが一番おいしい気がするんよね」

「分かる。分かるけど、それなら勝手に持っていきいな」

亜希はハムサンドを一つ、祥子に差し出した。

「分かってないなあ、自分で取るんじゃなくて、亜希からもらったハムサンドに価値があるんよ」

「分からんわあ」

呆れた声を出しながら、自分も似たようなものだと思う。

亜希は机の中にため込んでいる割り箸を一本取り出して、蓋に乗せられた玉子焼きを頬

張った。じゅわっと、甘みが口の中いっぱいに広がる。

「今日の玉子焼きは甘口かあ」

「亜希が一番好きな味やろ」

「おばちゃん分かってるわ」

いつもどおり笑えている気はしない。それでも、いつもどおりの調子で返せている気はする。たぶん。

亜希が制服のポケットに手を突っ込むと、スマホの感触が手に伝わった。ポケットの中で何度か掴んでは離す。

「あ、昨日塾で面白い飴もらったんよ」

唐辛子のイラストが描かれた飴を二つ、祥子が机に転がす。亜希はそのうちの一つを手に取った。

「おいしくなかったら、祥子、くすぐりの刑な」

「そこまで責任は持てんって」

飴を口に含むと、辛みの混じった甘さが口の中に広がった。

「微妙」
「やんなあ」
同じように飴を食べた祥子が「残念」と言いながら、亜希が出しっぱなしにしていた筆箱からボールペンを取った。ポケットからメモ帳を出して『とうがらしアメはビミョー』と書く。
「相変わらずメモ魔ですこと」
ふわふわもこもこしたクマの絵が描かれた水色のメモ帳を横目に、亜希はスマホを取り出した。透明なカバーをつけただけのスマホの背面には、祥子と撮ったプリクラが挟んである。プリクラを指の腹で撫で、画面を伏せて机に置いた。
「先輩もやっぱり微妙って言ってた」
「いつ」
「え？　今日の朝、登校する時」
「ふうん。ま、唐辛子は飴には向いてへんってことやな」

亜希は飴の包み紙に折り目をつけて、顔を上げられずにいた。

「ていうか祥子、先輩が微妙って言った飴、あたしに食べさせたん？」

「ゆるして」

「ゆるさん」

二人で肩を小突き合って、肩をふるわせて笑った。

「あと、先輩が言ってたんやけどさ。三年生って、年が明けたらもうほとんど登校ないんやって」

プリクラの中で笑う祥子と、目の前で穏やかに話す祥子を見比べる。

「先輩と学校で会えるんも、あとちょっとなんやなあ」

あ、だめだ。そう思ったときには、口が動いていた。

「祥子はさあ、あんな男のどこがいいんよ？あたしには分からん趣味やわ」

いつも控えめに笑っている祥子が、その瞬間、笑うことをやめた。

チャイムが鳴って、祥子がお弁当箱を片付けた。いつもなら一言なにかを言って席を立つ祥子が、何も言わずに目をそらしたまま自席に帰って行った。

「プリン、買いに行かん？」

放課後、唐突にそう言った亜希を見上げて、祥子は立ち上がった。

ふたりで歩く帰り道は静かだった。ローファーがアスファルトを蹴る音と、自動車が走る音、それから遠くから聞こえる子どもの笑い声が、ずっと耳に届いていた。

マフラーに口元を埋めながら、となりを歩く祥子の様子を窺う。

祥子はいつもどおり姿勢が良くて、前をまっすぐ見たままで、何を考えているのか分からなかった。

（どうしよう）

口を開こうとしては、声が出なかった。いつもならどうってことない沈黙が、今は痛い。

「……寒いね」

亜希がようやく絞り出した一言に、祥子は「冬やからね」と返した。

それからまた何を話していいか分からなくなった。

ずっと前を見ていた祥子が、赤信号に引っかかったときに、脇の自販機に目をやった。

亜希が「なんか飲む？」と聞いたら「プリン食べるんやろ」と返ってきて、やっぱりそれからロを開けなくなった。

コンビニに着いて、自動ドアが反応したのと同時に、鼻の奥がツンとした。

祥子がちらりと亜希を見て、ため息をついた。

亜希は拳を握りしめて、その場から動けなかった。

「半分こね」

そう言いながら、いつもよりも少し高価なプリンを手に取った祥子が、亜希を振り返る。

「ん、半分こ」

亜希の拳が少し緩む。祥子の目元も、少し緩んでいるように見えた。

プリンを買って出て、そのままコンビニの横にある公園のベンチに並んで腰掛ける。

「亜希、先に食べる？」

「あとでいい」

「そう」

軽く頷いた祥子は、コンビニでもらったスプーンを早々に開けていた。

今朝までなら『先に食べる気満々だったやろ』なんて言いながら笑い合えた。

「あー、おいし」

となりで祥子がふわりと笑ったのを見て、亜希の胸はきゅっと締まった。

風の音がふたりの間を流れていく。

しばらくして、祥子がプリンとスプーンを差し出しながら言った。

「はい、半分」
「……おいし」
「ね」
いつもより高価なプリンは、いつもより少しだけおいしい気がした。
「寒いけどさあ、こういうのもたまにはいいよね」
独り言のように祥子が呟く。
「……お昼」
亜希の声が詰まって、少しうわずった。顔が一気に熱くなる。
プリンをじっと見つめて、カップをぎゅっと握って続けた。
「ごめん」
祥子は「うん」とだけ言った。
おそるおそる隣を窺うと、祥子はまっすぐ前を見据えていた。
「祥子、怒ってる？」
「ちょっとだけ」
「ちょっとなんや」

「じゃあ、だいぶ」
「ごめんなさい」
祥子が軽く吹き出した。
祥子の顔を覗き込んで亜希が首を傾げると、祥子も首を傾げる。
「あ、食べ終わってんね」
祥子は亜希が持っていた空のカップとスプーンを手に取って、レジ袋に入れた。そのまま立ち上がり、ゴミ箱へ向かう。
その後ろ姿を見送りながら、亜希はポケットの中のスマホを取り出して、ロックを解除する。動画一覧には、昨日の動画が残っていた。
一度タップすれば再生される。分かっている。
「私はさあ！」
立ち止まった祥子が、亜希に背を向けたまま声を張った。

「亜希がいろいろ心配してくれてるのも、たぶん全部分かってる！　それでも、私はやっぱり先輩が好きやから！」

画面を祥子のほうに向けたら、何かが変わるかもしれない。

十数秒、ずっと画面が震えている動画だった。昨日、亜希が撮った動画はそれだけしかない。

「もうちょっとだけ見ててほしい！」

祥子の声が、やけにはっきり耳に届いた。

亜希は一度鼻をすすってから、マフラーの中で小さく呟いた。

「……分かった」

亜希がスマホをポケットにしまうのと同時に、祥子の手元で、レジ袋がくしゃりと鳴った。